

初年次教育の広がりとう大学の属性との関係

Relationship between the popularity of a First-Year Experience Program and Attributes of Universities

田中 亜裕子*

Ayuko TANAKA

抄 録

本稿では、2012 年度の調査をもとに、初年次教育プログラムの実施状況と実施形態についてまとめた。次に初年次教育プログラムの実施状況による大学の属性の違いについて検討し、初年次教育プログラムがどのような大学で行われているのか、また、実施していない大学は、どのような属性をもつのかについて明らかにした。その結果、2007 年度の調査と比較すると、学士課程教育の中に定着した初年次教育プログラムは増えていることがわかった。また、初年次教育プログラムの実施状況に、大学の物理的な属性が影響を及ぼしていることが明らかとなった。

1. はじめに

1. 1. 研究の背景と課題

初年次教育は現在の日本における学士課程教育の中に明確に位置づけられている。2008 年 3 月に出された、中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（審議のまとめ）において「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」として「初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける」としている。

日本の初年次教育に関する実態調査には、2001 年 11 月に私立大学全学部を対象に行われた私学高等研究所（2005）による「私立大学における一年次教育に関する調査」と、2007 年に行われた国立教育政策研究所の全国調査がある。これらの調査によると、初年次教育は、2001 年に 80%の導入率であったが、2007 年には 90%の導入率を超えており、初年次教育学士教育課程における定着を裏付ける結果となっている。2007 年度調査から 5 年経過した今、初年次教育はどのような広がりを見せているのであろうか。

本稿では文部科学省の研究助成金を受けて実施された「学士課程教育のマネジメントと初年次教育に関する調査」の一部を用い、初年次教育プログラムの実態を明らかにし、プログラム実施状況

* 関西国際大学人間科学部 教育総合研究所学内研究員

について、大学の属性という観点から要因分析を行うことで、初年次教育の今後の課題について検討を加えたい。

1. 2. 分析対象

分析に使用するデータは、文部科学省の 2012 年度「大学間連携等による共同研究」の研究助成金を受けて実施された「学士課程教育のマネジメントと初年次教育に関する調査」である。この調査は、2013 年 1 月から 2 月にかけて、国公私立すべての大学の学長を対象として実施されたものである。発送数は 764 件であり、有効回答数は 268 件、回答率は 35.1%であった。

1. 3. 論文の構成

次に続く第 2 節では、国立教育政策研究所が 2007 年に実施した「大学における初年次教育に関する調査」を用いた川島（2008）の分析と比較しながら、初年次教育プログラムの実施状況と実施形態についてまとめる。

次に、第 3 節では初年次教育プログラムの実施状況による大学の属性の違いについて検討し、各々の初年次教育プログラムはどのような大学で行われているのか、また各々の初年次教育プログラムが実施されていない大学はどのような属性をもつのかについて明らかにする。

最後に第 4 節では、前節の分析結果に解釈を加え、全体のまとめとする。

2. 初年次教育プログラムの実施状況と実施形態

初年次教育プログラムの実施状況と実施形態を把握するために、以下に示す 8 領域を設定した。この領域は国立教育政策研究所が 2007 年に実施した「大学における初年次教育に関する調査」で用いられた領域をそのまま使用している。このことで現状を把握するだけでなく、先行研究との比較を可能にしている。

なお、今回の調査では、これら 8 領域に「高校補習」を付加して実施状況と実施形態を尋ねた。従来、高校補習はリメディアル教育に分類されるため、「初年次教育」には含まれない。しかし、高校での学習で培われた基礎学力は、専門教育を学修するための大前提となることを考えると、その実施状況や実施形態を把握することは、今後の初年次教育を考える上で重要な資料となる。また、2001 年 11 月に全国の私立大学 1170 学部の学部長を対象にした、初年次教育に関する調査では、設置数は 2.0%と非常に少ないが、初年次教育の中に「補習教育型科目」が存在することが確認されている。2001 年調査から 11 年が経過した今、補習教育が大学にどれほど浸透しているのか、またどのような扱いで実施されているのかについて把握することを目的に、初年次教育プログラムと合わせて分析の対象とした。

【初年次教育プログラムの領域】

- (1) スタディ・スキル系（例：レポートの書き方、図書館の利用法等）

- (2) スチューデント・スキル系（例：学生生活における時間管理や社会生活等）
- (3) オリエンテーションやガイダンス（例：大学教育や自大学に関する理解）
- (4) 専門教育への導入（例：専門教育への関心の喚起）
- (5) 学びへの導入を目的とするもの（例：教養ゼミ、総合演習）
- (6) 情報リテラシー（情報処理、情報倫理等）
- (7) 自校教育（例：自大学の沿革、社会的役割等）
- (8) キャリアデザイン（例：ライフプラン、キャリア準備）

※これら8領域に「高校補習」を加えて調査を実施した。

2. 1. 初年次教育プログラムの実施状況

図1は各領域の実施大学数を示したものである。2007年調査と比較すると、「学びへの導入を目的とするもの」が「専門教育への導入」より上回っていることを除けば、グラフの線形はほぼ同一である。近年、「学びへの導入」は多くの大学が力を注いできている領域であるとの山田（2013）の指摘を裏付ける結果となった。

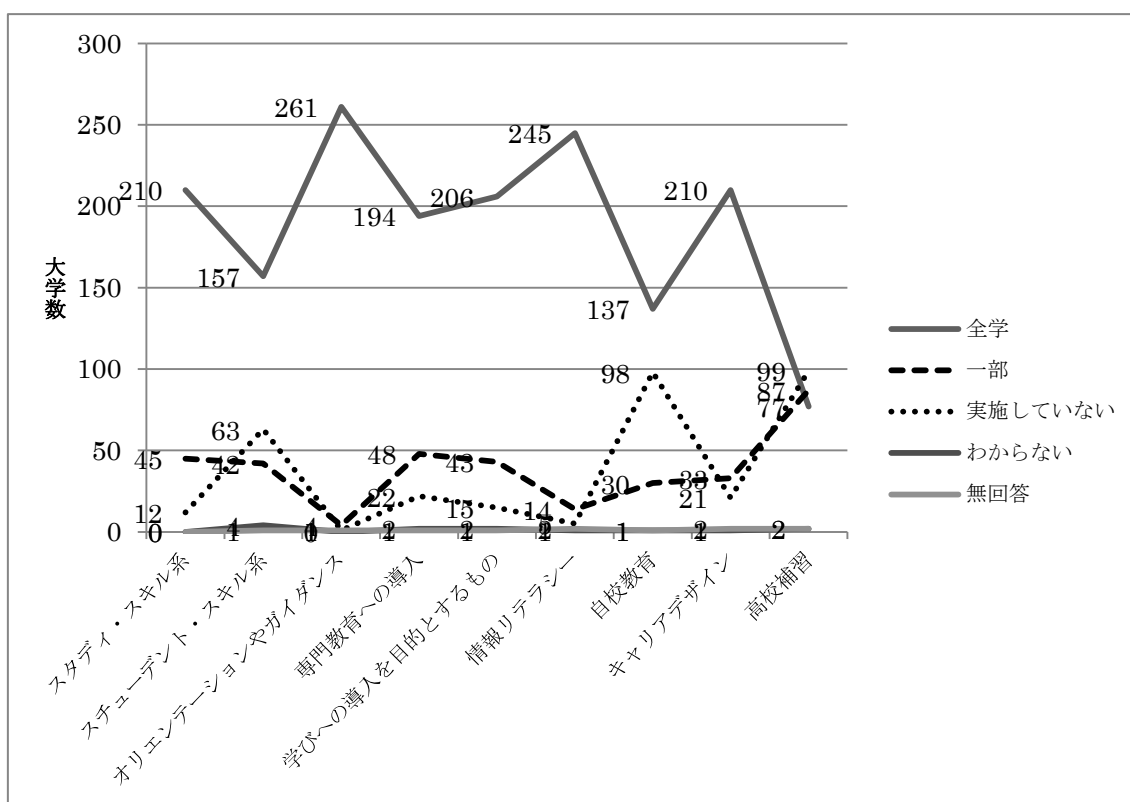


図1 初年次教育プログラムの実施大学数

次に実施率を示したものが表1である。

全学実施率の高いプログラムは「オリエンテーションやガイダンス」（97.8%）と「情報リテラシー

ー」(91.8%)である。これに一部実施を合計すると 90%の実施率を超えるプログラムは「スタディ・スキル系」、「専門教育への導入」、「学びへの導入を目的とするもの」、「キャリアデザイン」である。本調査では大学毎、2007 年度調査では学部毎にデータを収集しているため、単純比較はできないが、2007 年度調査で定着が確認された「オリエンテーションやガイダンス」、「スタディ・スキル系」、「情報リテラシー」、「専門教育への導入」に加え、今回の調査では「学びへの導入を目的とするもの」、「キャリアデザイン」の実施率も高く、これらのプログラムは、学士課程教育の中に普遍的に位置づけられたと見てよいであろう。一方、回答にばらつきが見られたプログラムは「自校教育」、「スチューデント・スキル系」である。

なお、「高校補習」は 2001 年度調査では 2.0%の設置数であったのが、今回の調査では全学実施が 28.8%であり、一部実施と合わせると 61.4%にもものぼることが確認された。

表1 初年次教育プログラムの実施率 (%)

	全学＋一部			実施していない	わからない	無回答
		全学	一部			
スタディ・スキル系	95.5	78.7	16.9	4.5	0	0
スチューデント・スキル系	74.5	58.8	15.7	23.6	1.5	0.4
オリエンテーションやガイダンス	99.3	97.8	1.5	0.4	0	0.4
専門教育への導入	90.6	72.7	18	8.2	0.7	0.4
学びへの導入を目的とするもの	93.3	77.2	16.1	5.6	0.7	0.4
情報リテラシー	97	91.8	5.2	1.9	0.4	0.7
自校教育	62.5	51.3	11.2	36.7	0.4	0.4
キャリアデザイン	91	78.7	12.4	7.9	0.4	0.7
高校補習	61.4	28.8	32.6	37.1	0.7	0.7

2. 2. 初年次教育プログラムの実施形態

初年次教育プログラムの実施形態について図2にまとめた。プログラムによって実施形態が異なることが見て取れる。大学でのこれからの学びに直結するもの（スタディ・スキル系、専門教育への導入、学びへの導入、情報リテラシー）は必修科目で実施されている割合が高いのに対し、大学生活を支えるもの（ガイダンスやスチューデントスキル）は、課外プログラムとして実施されていることがわかる。

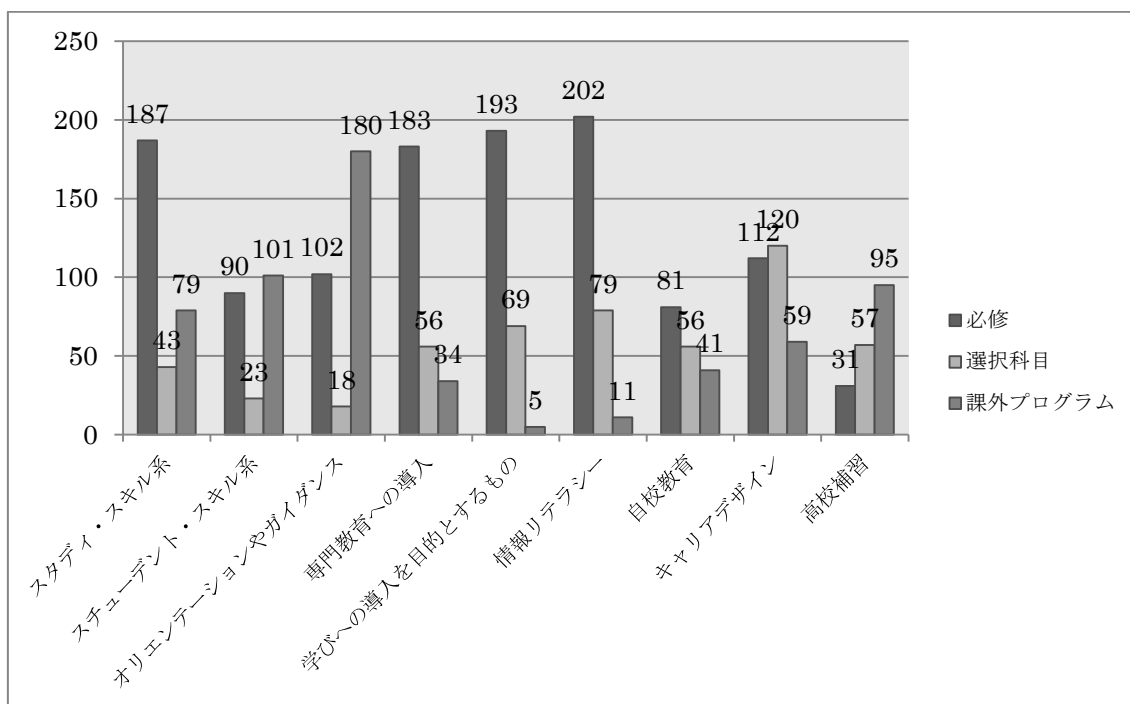


図2 初年次教育プログラムの実施形態（複数回答）

3. 初年次教育プログラムの実施状況による大学の属性の違い

初年次教育プログラムの実施状況は、大学のどのような属性に左右されるのであろうか。本節では、8 つ初年次教育プログラムと「高校補習」の実施の有無によって、以下（1）～（8）にあげた大学のさまざまな属性に違いがみられるかどうかを検討した。

【大学の属性】

- （1）大学の設置形態
- （2）大学の学部数
- （3）平成24年度の第1学年の入学者数
- （4）設置年
- （5）立地条件
- （6）通学の便
- （7）学生の学力レベル
- （8）他大学と比較した場合の、改革状況の進み具合

その結果、「スチューデント・スキル系」「専門教育への導入」「学びへの導入を目的とするもの」「自校教育」「キャリアデザイン」「高校補習」の実施の有無によって、大学の属性に違いがみられた。また、大学の属性に違いがみられなかった初年次教育プログラムは、「スタディ・スキル系」「オリエンテーションやガイダンス」「情報リテラシー」であった。以下に、違いが認められた初年次教育プログラムの結果をまとめた。

3. 1. 「スチューデントスキル系」の実施状況による大学の属性の違い

「スチューデント・スキル系」の初年次教育プログラムを実施している大学と実施していない大学で、大学の属性に違いが見られるかを明らかにするために、「実施」と「未実施」それぞれに関して、大学の属性の違いを χ^2 乗検定により比較した。その結果、「学部数」と「第1学年入学者数」の違いが有意であった(学部数: $\chi^2(2)=7.511, p<.05$, 第1学年の入学者数: $\chi^2(2)=8.503, p<.05$)。そこで、残差分析を行った結果、スチューデント・スキル系プログラムの実施は、4つ以上の学部をもつ大学に多いことが示された。また、実施していない大学は、学部数が一つであったり、1年の入学者数が250名以下の小規模大学に多いことが明らかになった(表2, 3)。

表2 「スチューデントスキル系」と「学部数」

			学部数		
			1学部	2~3学部	4学部以上
スチューデント・スキル系	実施	度数	60	67	66
		調整された残差	-2.6**	.7	2.0*
	未実施	度数	31	19	13
		調整された残差	2.6**	-.7	-2.0*

* $p<.05$ ** $p<.01$

表3 「スチューデントスキル系」と「第一学年の入学者数」

			第1学年入学者数		
			250人以下	251人~750人	751人以上
スチューデント・スキル系	実施	度数	59	68	70
		調整された残差	-2.9**	1.8	1.2
	未実施	度数	31	14	17
		調整された残差	2.9**	-1.8	-1.2

* $p<.05$ ** $p<.01$

3. 2. 「専門教育への導入」の実施状況による大学の属性の違い

「専門教育への導入」の初年次教育プログラムを実施している大学と実施していない大学で、大学の属性に違いがみられるかを明らかにするために、「実施」と「未実施」それぞれに関して、大学の属性の違いを χ^2 乗検定により比較した。その結果、「1学年の入学者数」および「通学の便」の違いが有意であった(第1学年の入学者数: $\chi^2(2)=6.481, p<.05$, 通学の便: $\chi^2(2)=6.651, p<.05$)。そこで、残差分析を行ったところ、専門教育への導入プログラムの実施は、通学の便がよい大学に

多いことがわかった。また、実施していない大学は、第1学年の入学者が250人以下の小規模大学に多いことが明らかとなった（表4、5）。

表4 「専門教育への導入」と「第1学年の入学数」

			第1学年入学数		
			250人以下	251人~750人	751人以上
専門教育への導入	実施	度数	77	79	83
		調整された残差	-2.5*	1.4	1.1
	未実施	度数	13	4	5
		調整された残差	2.5*	-1.4	-1.1

*p<.05 **p<.01

表5 「専門教育への導入」と「通学の便」

			通学の便		
			よい	普通	わるい
専門教育への導入	実施	度数	99	98	41
		調整された残差	2.6**	-1.6	-1.2
	未実施	度数	3	13	6
		調整された残差	-2.6**	1.6	1.2

*p<.05 **p<.01

3. 3. 「学びへの導入を目的とするもの」の実施状況による大学の属性の違い

「学びへの導入を目的とするもの」の初年次教育プログラムを実施している大学と実施していない大学で、大学の属性に違いがみられるかを明らかにするために、「実施」と「未実施」それぞれに関して、大学の属性の違いを χ^2 検定により比較した。その結果、通学の便($\chi^2(2)=12.898, p<.01$)について有意な差があった。そこで、残差分析を行った結果、学びの導入を目的とするプログラムを実施していない大学は、通学の便がわるいところに多いことが明らかとなった（表6）。

表6 「学びへの導入を目的とするもの」と「通学の便」

			通学の便		
			よい	普通	わるい
学びへの導入を目的とするもの	実施	度数	98	107	40
		調整された残差	1.5	1.3	-3.6**
	未実施	度数	3	4	8
		調整された残差	-1.5	-1.3	3.6**

*p<.05 **p<.01

3. 4. 「自校教育」の実施状況による大学の属性の違い

「自校教育」の初年次教育プログラムを実施している大学と実施していない大学で、大学の属性に違いが見られるかを明らかにするために、「実施」と「未実施」それぞれに関して、大学の属性の違いを χ^2 乗検定により比較した。その結果、「設置形態」、「学部数」、「第1学年入学者数」、「設置年」および「通学の便」の違いが有意であった（設置形態： $\chi^2(2)=33.482, p<.001$ ，学部数： $\chi^2(2)=7.938, p<.05$ ，第1学年入学者数： $\chi^2(2)=13.804, p<.01$ ，設置年： $\chi^2(2)=16.252, p<.001$ ，通学の便： $\chi^2(2)=9.979, p<.01$ ）。そこで残差分析を行った結果、自校教育プログラムを実施している大学は、私立大学、第1学年入学者数が751人以上、設置年が1950年以前、通学の便のよいなどの特徴があることが明らかとなった。一方、実施していない大学は、公立大学、学部数が1学部、第1学年入学者数が250人以下、設置年が1991年以降、通学の便がわるいなどの特徴をもつことが示された（表7，8，9，10，11）。

表7 「自校教育」と「設置形態」

			設置形態		
			国立	公立	私立
自校教育	実施	度数	26	9	132
		調整済み残差	1.5	-5.8**	3.5**
	未実施	度数	9	31	58
		調整済み残差	-1.5	5.8**	-3.5**

*p<.05 **p<.01

表 8 「自校教育」と「学部数」

			学部数		
			1 学部	2~3 学部	4 学部以上
自校教育	実施	度数	47	60	57
		調整された残差	-2.8**	1.2	1.6
	未実施	度数	44	28	24
		調整された残差	2.8**	-1.2	-1.6

*p<.05 **p<.01

表 9 「自校教育」と「第 1 学年入学者数」

			第 1 学年入学者数		
			250 人以下	251 人~750 人	751 人以上
自校教育	実施	度数	48	48	69
		調整された残差	-2.3*	-1.3	3.7**
	未実施	度数	42	36	19
		調整された残差	2.3*	1.3	-3.7**

*p<.05 **p<.01

表 10 「自校教育」と「設置年」

			設置年		
			1950 年以前	1951~1990 年	1991 年以降
自校教育	実施	度数	63	58	45
		調整された残差	3.1**	.7	-3.8**
	未実施	度数	19	30	49
		調整された残差	-3.1**	-.7	3.8**

*p<.05 **p<.01

表 1 1 「自校教育」と「通学の便」

			通学の便		
			よい	普通	わるい
自校教育	実施	度数	73	69	21
		調整された残差	2.4*	-.2	-2.8**
	未実施	度数	29	43	26
		調整された残差	-2.4*	.2	2.8**

*p<.05 **p<.01

3. 5. 「キャリアデザイン」の実施状況による大学の属性の違い

「キャリアデザイン」の初年次教育プログラムを実施している大学と実施していない大学で、大学の属性に違いが見られるかを明らかにするために、「実施」と「未実施」それぞれに関して、大学の属性の違いを χ^2 乗検定により比較した。その結果、「第1学年入学者数」、「通学の便」および「学生の学力レベル」の違いが有意であった（第1学年入学者数： $\chi^2(2)=6.206, p<.05$ ，通学の便： $\chi^2(2)=6.213, p<.05$ ，学生の学力レベル $\chi^2(2)=8.576, p<.05$ ）。そこで、残差分析を行った結果、キャリアデザインを実施している大学は、第1学年入学者数が751人以上、通学の便が普通といった特徴があることが明らかとなった。一方、第1学年入学者数が250人以下で、通学の便の良い、学生の学力レベルが高いなどの特徴をもつ大学では、実施率が低いことが示された（表12、13、14）。

表 1 2 「キャリアデザイン」と「第1学年入学者数」

			第1学年入学者数		
			250人以下	251人~750人	751人以上
キャリアデザイン	実施	度数	77	78	85
		調整された残差	-2.3*	.4	2.0*
	未実施	度数	12	6	3
		調整された残差	2.3*	-.4	-2.0*

*p<.05 **p<.01

表 1 3 「キャリアデザイン」と「通学の便」

			通学の便		
			よい	普通	わるい
キャリアデザイン	実施	度数	88	107	44
		調整された残差	-2.3*	2.3*	-.1
	未実施	度数	13	4	4
		調整された残差	2.3*	-2.3*	.1

*p<.05 **p<.01

表 1 4 「キャリアデザイン」と「学生の学力レベル」

			学生の学力レベル		
			高い	平均程度	低い
キャリアデザイン	実施	度数	59	103	68
		調整された残差	-2.8**	.8	1.9
	未実施	度数	11	7	2
		調整された残差	2.8**	-.8	-1.9

*p<.05 **p<.01

3. 6. 「高校補習」の実施状況による大学の属性の違い

「高校補習」の初年次教育プログラムを実施している大学と実施していない大学で、大学の属性に違いが見られるかを明らかにするために、「実施」と「未実施」それぞれに関して、大学の属性の違いを χ^2 乗検定により比較した。その結果、「学部数」,「第 1 学年入学者数」,「設置年」および「通学の便」の違いが有意であった（設置形態： $\chi^2(2)=15.310, p<.001$, 学部数： $\chi^2(2)=20.360, p<.001$, 第 1 学年入学者数： $\chi^2(2)=19.945, p<.01$, 設置年： $\chi^2(2)=7.600, p<.05$, 通学の便： $\chi^2(2)=6.083, p<.05$ ）。そこで、残差分析を行った結果、高校補習の実施は、国立大学、学部数が 4 学部以上、第 1 学年入学者数が 751 人、設置年が 1950 年以前などの属性をもつ大学に多かった。一方、公立大学、学部数が 2~3 学部以下、第 1 学年入学者数が 250 人に満たない、1991 年以降に設置された交通の便のわるい大学などの属性をもつ大学は、実施の割合が低いことが示された。

表 1 5 「高校補習」と「設置形態」

			設置形態		
			国立	公立	私立
高校補習	実施	度数	30	16	118
		調整された残差	2.8**	-3.2**	.4
	未実施	度数	6	24	69
		調整された残差	-2.8**	3.2**	-.4

*p<.05 **p<.01

表 1 6 「高校補習」と「学部数」

			学部数		
			1 学部	2~3 学部	4 学部以上
高校補習	実施	度数	48	46	67
		調整された残差	-2.3*	-2.2*	4.5**
	未実施	度数	42	40	14
		調整された残差	2.3*	2.2*	-4.5**

*p<.05 **p<.01

表 1 7 「高校補習」と「第 1 学年入学者数」

			第 1 学年入学者数		
			250 人以下	251 人~750 人	751 人以上
高校補習	実施	度数	42	50	70
		調整された残差	-3.6**	-.5	4.1**
	未実施	度数	47	33	18
		調整された残差	3.6**	.5	-4.1**

*p<.05 **p<.01

表 18 「高校補習」と「設置年」

			設置年		
			1950 年以前	1951~1990 年	1991 年以降
高校補習	実施	度数	60	52	51
		調整された残差	2.6**	-.6	-2.0*
		度数	21	35	43
		調整された残差	-2.6**	.6	2.0*

*p<.05 **p<.01

表 19 「高校補習」と「通学の便」

			通学の便		
			よい	普通	わるい
高校補習	実施	度数	67	73	22
		調整された残差	.8	1.1	-2.5*
	未実施	度数	35	37	25
		調整された残差	-.8	-1.1	2.5*

*p<.05 **p<.01

3. 7. 初年次教育プログラムの実施状況と大学の属性についての考察

まず、プログラム実施の有無で大学の属性に差がみられた5つの領域について概観する。「チューデントスキル系」、「専門教育への導入」、「学びの導入を目的とするもの」、「自校教育」、「キャリアデザイン」の5つのうち4つのプログラムに共通する、実施の有無で差があった属性は「第一学年入学者数」と「通学の便」であった。「第一学年入学者数」が多い大学ほどプログラムの実施が多く、入学者数が少ない大学ほどプログラム実施が少なかった。そして「通学の便」がよい大学ほど実施が多く、わるい大学ほど実施が少ないという結果であった。第一学年入学者数は、大学の規模を表す指標となるだろう。また、「通学の便」については指標として解釈しづらいが、物理的に恵まれている大学ということになるだろうか。

次にプログラム別に特徴をまとめると、「自校教育」については、前述した共通の特徴に加え、「設置年」が1950年以前の大学に多く、1991年以降の大学には少ないことがわかった。「自校教育」は初年次教育プログラムの中で最も低い実施率であるが、それでも全学実施の割合は50%を超え、全学実施と一部実施を合わせると60%を超えており、2007年度の調査時からかなり浸透してきたといえるが、歴史教育の側面をもつ自校教育は、歴史の浅い大学にとっては、導入しづらいプログラムであると考えられる。

「キャリアデザイン」については、共通の特徴に加え、「学生の学力レベル」が高い大学では、導入が少ないことが確認された。学力レベルの高い学生の集まる大学では、大学での学びに対する動機づけを高めるためのキャリア教育を必要とする学生が限られていることの表れであろうか。

「スチューデントスキル系」、「専門教育への導入」、「学びの導入を目的とするもの」の3つについては、前述の結果とほぼ同様で、個別の特徴は認められなかった。

そして、属性によって実施の有無に有意な差のなかった初年次教育プログラム「スタディ・スキル系」、「オリエンテーションやガイダンス」、「情報リテラシー」の実施率(表1参照)についてみると、「全学+一部」、「全学」で実施率が高い上位3位がこのプログラムである。このことから、これら3プログラムについては、すでに大学の属性を超えて、大学に浸透していると考えられる。

最後に、リメディアル教育に分類される「高校補習」であるが、属性の共通の特徴に加え、国立大学で多く実施され、公立大学では実施が少ないことが明らかとなった。また、設置年についても差があり、設置年が古い大学で多く実施されていることがわかった。なぜ国立で多く、公立で少ないかということについては、解釈の材料がないため考察が困難であった。

4. おわりに

本稿では、初年次教育プログラムの実施状況と実施形態についてまとめ、初年次教育プログラムの実施状況と大学の属性との関連について検討した。分析の結果得られた知見は次の2つである。

第一に、2007年度調査で定着が確認された「オリエンテーションやガイダンス」、「スタディ・スキル系」、「情報リテラシー」、「専門教育への導入」に加え、「学びへの導入を目的とするもの」、「キャリアデザイン」の実施率が高まったことである。これらのことから、学士課程教育の中で、初年次教育プログラムがさらに定着していることが明らかとなった。そして「高校補習」について2001年度調査では2.0%の設置数であったのが、今回の調査では全学実施が28.8%であり、一部実施と合わせると61.4%にもものぼることが確認された。

第二に、初年次教育プログラム（高校補習も含む）を実施している割合の高い大学は、規模の大きい大学で、通学の便がよいという特徴を持っていることが明らかになった。また、初年次教育プログラム（高校補習も含む）を実施している割合の低い大学は、小規模であるという特徴を持っていることが明らかになった。

これらの知見が示しているのは、初年次教育プログラムの多くは、学士課程教育の中で定着しているが、プログラム実施の有無は、大学の規模という物理的な属性に影響を受けている、という事実である。規模の大きい大学は様々なプログラムを取り入れているが、小規模大学は実施していないプログラムが多い。この理由については、検証に必要な材料がないため、解釈は推測の域を出ないが、大規模な大学になるほど、初年次教育をプログラム化して提供することで、効率的に初年次生の適応を促すことができるのに対し、小規模の大学は、入学者数が少ないゆえに、プログラムとしてわざわざ初年次教育を導入せずとも、初年次生に十分に目の行き届いたサポートを展開できるということを示しているのかもしれない。今後の検討が待たれるところである。

初年次教育はすでに学士課程教育の中で、確固たる地位を確立しているが、初年次教育がどのような理由で導入されているのか、その効果についても、今後、明らかにしていくことが必要であろう。それによって、大学の特徴に合わせてカスタマイズされた、大学への適応により効果的なプログラムを、初年次生に提供していく手掛かりとなるであろう。

【参考・引用文献】

川島啓二「初年次教育の諸領域とその広がり」『初年次教育学会誌』第1巻第1号,26-32頁,2008

山田礼子 「日本における初年次教育の動向—過去, 現在そして未来に向けて—」: 初年次教育学会編「初年次教育の現状と未来」世界思想社,2013

濱名篤,川嶋太津夫編著「初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向」丸善株式会社,平成18年
森利枝「一年次教育の意義と課題 第29回公開研究会の議論から」アルカディア学報,No.255

<http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0255.html>

森利枝「導入教育の実態—学部長調査の結果から（中間まとめ）—2—」アルカディア学報,No.135

<http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0135.html>

山田礼子「導入教育の実態—学部長調査の結果から（中間まとめ）—1—」アルカディア学報,No.134

<http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0134.html>

Abstract

An overview of implementing a “First-Year Experience Program” for college freshmen is reported based on a survey conducted in fiscal 2012. Differences in the attributes of universities based on the extent of implementation were examined by asking the following questions: (1) what kinds of universities are implementing the program, and (2) what are the attributes of universities that are not implementing the program? The results indicated that the First-Year Experience Program was more popular in undergraduate education compared to the survey conducted in fiscal 2007. Furthermore, it was suggested that the state of implementing the program was affected by physical attributes of universities.